

ベルクソン『持続と同時性』における科学観の問題

吉野 齊志 (Yoshino Tadashi)

京都大学

哲学者アンリ・ベルクソン（1859–1941）は哲学と科学がそれぞれ実在の半分を認識するものであると見なし、両者の「接点」や協働を主張した。しかし哲学と科学の協働とは具体的にどのような行程なのか。それを明らかにするためには、ベルクソンが同時代の科学と対決した実際の事例を検討する必要があるだろう。

本発表では彼がアインシュタインの相対性理論と対決した著作『持続と同時性』（1922 年）に着目したい。この著作の議論は、現代の視点から見ると実証的に指示されない結論へと導くように見える箇所を含むこともあり、しばしば哲学者の物理理論に対する誤解と対決の「敗北」を示すものとして読まれてきた。しかしそのようなきわどい事例であるからこそ、時にはベルクソン自身の言っていることを超えて、この問題に関する奥深い示唆を与えてくれるはずである。

本発表はたしかにベルクソンの議論は相対性理論に対する誤解を含むことを認める。彼はあまりにも相対的に運動する系の「相互性」を強調したため、二つの系ではまったく同じことが起こるという（実証的に指示されない）主張をしている。これは彼が「科学」を幾何学的認識と見なしたことに基づいている。幾何学的には運動と静止はまったく相対的であり、そこに実在的な動性は登場しない。

しかし反面、それは物理学を幾何学化するというアインシュタイン自身の関心事を正確に捉えてもいた。その上で問題になるのは、幾何学化というのが正確に言って何を意味しているかである。最初から量的なものしか把握しないことと、質的なものを受け取りそれを数量的な言語に翻訳することは同じではない。そしてベルクソンの科学論は後者の見解を認めるように思われる。そのことを踏まえた時、ベルクソンの哲学に即しながらも彼が『持続と同時性』の中で述べているのとは異なる相対性理論についての見解も提示できるであろう。